

『82年生まれ、キム・ジョン』

監督:キム・ドヨン

脚本:ユ・ヨンア

出演:チョン・ユミ/コン・ユ

2019年/韓国/118分



公式サイト

ブルーレイ・DVD 発売中
発売元:クロックワークス
販売元:ハピネット・メディアマーケティング
© 2020 LOTTE ENTERTAINMENT All Rights Reserved.

社会を旅する シネマ

きつと もっと 近くなる
きつと もっと 知りたくなる

4年ほど前のある朝、ご近所の“初めまして”の高齢女性から「お嬢さんがいたのね！羨ましいわあ。うちも女の子がほしくて、そこのお稲荷さんに何度もお願いしに行ったのよ」と急に声をかけられた。ちょうど前日、私は危篤の祖母を見舞ったばかり。戦前生まれの祖母が男性と同等の教育を受けることも、自由に職業を選ぶこともできなかったことに想いを馳せていた。だから「女の子がほしかった」という言葉は、とても意外に聞こえた。

本作の舞台・韓国では、かつて人口増加を抑えるため産児制限政策を展開したところ、男女の出生比率に大きな不均衡が生じたという。男児を望む家庭が多く、女兒の場合、墮胎されたためだ。女兒は望まれない。その背景にある家父長制や、女性ゆえに直面する困難の数々が、本作には詰まっている。

出産を機に仕事を辞め、育児や家事に奔走する主人公ジョンは、時折、他者が憑依したような言動をするようになる。その要因を彼女の人生を振り返りひも解いていくと、幼い頃から大人になるまで、家庭、学校、職場と、あらゆるライフステージやコミュニティで、ジェンダー問題に直面してきたことが見えてくる。

本作は韓国で130万部突破したベストセラー小説が原作だが、小説と映画は大きく異なる点が二



「良い夫」が際立たせる深刻さと「憑依」に込められたメッセージ

アーヤ藍

つある。ひとつは夫の存在感だ。小説ではジョン側から見た夫のみが描かれ、「無理解の夫」に見える。一方、映画は夫の眼差しが多く描かれている。ジョンを大事に想い、愛情を注ぐ彼は、小説よりずっと「良い夫」だ。だが、だからこそ問題の深刻さが浮き彫りになる。妻想いの夫でも、ときに見当違いな発言をし、ジョンを一層苦しめる。夫個人が優しさや愛情をもっていても、社会で染みついたジェンダー観は根深く影響する。「社会の意識」を変えない限り、問題の根本は変わらないと強く感じる。

もうひとつは、ジョンに女性が憑依するシーンを映画ではしっかり描いていることだ。憑依が起きるのは、ジョンが言いたいことを飲み込むとき。憑依した人物がジョンに代わって声を上げることで、ジョンは守られる。それは「本人が声を上げられないときは、他の人が声を上げることで助け合える」ことの暗示にも感じられる。

そして憑依したジョンの言葉を受け取った人たちは、驚きや戸惑いを見せつつも、行動を変えていく。夫も弟も姑も母親も。ジョン自身もそうした言葉に守られ、今度は自分の声を上げていく。小説が世界中の共感を集め、「仲間」がいることが可視化されたからこそ、映画ではその仲間たちに「声を上げていこう」と呼びかけているようにも思う。それが社会の意識を変える一歩になるはずだという希望も込めて。

アーヤあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

